

備える 3.11から 災前の策

第158回 特別編・三重むすび塾

高台へ 観光客も住民も



「三重むすび塾」が開かれた三重県伊勢市二見町一本社へリ「まなづる」から

二見興玉神社 福田和人さん(57)



参拝者の安全を目指す
神社は海と山に挟まれており、台風のために高潮や土砂災害に注意を払っている。南海トラフ地震の津波対策で避難マニュアルを作っているが、例えば常動ではないみころが、旅行者らを誘導できるかは心もとない。地域を挙げて訓練することができたらしい。地域に訪れる方の安全のためにも参加したい。

二見町旅館組合長 増田幸信さん(59)



被害想定より詳しく
東日本大震災の時に二見浦にも津波警報が出て、宿泊客をバスで避難させたことがある。今思えば十分な対応だった。火災の訓練はしているが、津波の訓練もする必要がある。二見浦でどんな被害が想定されるか詳しく知りたい。夜間の避難が特に心配で、高台の照明をいっしょに点けておくようにしてはどうか。

賓日館事務局長 山本直子さん(40)



地域一丸だと心強い
賓日館のスタッフは女性2人だけのことがほとんど。訓練で感じたのは、観光客やお年寄り誘導する時に、消防団や地域の人が一丸だと心強いことだ。毎年9月にスタッフが津波から逃げる訓練はしている。一緒にする団体があればうれしい。避難場所に備蓄品がないことが気になっている。

二見まちづくりの会会長 北岡常正さん(71)



防災マップ配布継続
会として地域で防災マップを配布したり、講座を開いたりしてきた。防災への意識を高めようという目的で、今後も続けていきたい。むすび塾で学んだのは、旅行者を守る前提として「自分の命は自分で守ること」の大切さだ。地域で取り組む避難訓練には協力する。地元的事情に詳しい人たちの参加を求みたい。

伊勢市消防団副団長 五十子昌秀さん(57)



率先避難に力を入れる
東日本大震災では多くの消防団員が殉職した。まず自分の身を守り、周囲にも避難を促す「率先避難」に力を入れている。旅館を経営しているが、東日本大震災以降は、修学旅行で訪れる予定の学校から、事前にハザードマップの提出を求められるようになった。安心・安全な観光地にすることが必要だ。

皇学館大2年 磯和大智さん(20)



もっと大きい看板を
二見浦は旅行者の歩く道が狭い。避難誘導する時に海から離れるのが難しくなるのではないかと不安に感じた。旅行者の立場で考えると、避難場所を示す看板は大きくしてほしい。伊勢神宮内宮前のおはらい町で、防災プロジェクトに参加しており、三重むすび塾での経験を生かしたい。

三重大助教 水木千春さん(47)



情報不足 一番の不安
二見に住んでおり、旅行会社で働いた経験もある。知らない土地にいる観光客が一番不安なのは、情報がないことだと思う。観光業者から避難路を示されただけでも安心する。高台への避難誘導は地元の人々の役割。どう観光客を落ち着いて避難させられるか。日ごろから意識して、訓練することが欠かせない。



誘導課題を議論

むすび塾 東日本大震災を受け、河北新報社が中心となり、高台へ避難する際の課題を議論。津波の発生時に高台へ避難する際の課題を議論。津波の発生時に高台へ避難する際の課題を議論。

二〇一一年の東日本大震災の体験者らも、防災訓練と併せて、高台へ避難する際の課題を議論。津波の発生時に高台へ避難する際の課題を議論。

二〇一一年の東日本大震災の体験者らも、防災訓練と併せて、高台へ避難する際の課題を議論。津波の発生時に高台へ避難する際の課題を議論。

伊勢・二見浦

「三重むすび塾」が開かれた三重県伊勢市二見町一本社へリ「まなづる」から

宮城富谷市 大学生 佐々木花菜さん(20)
日ごろから意識
避難訓練に参加して、地盤がパニックになった。自分自身には気が付かないが、地域全体で防災前からの訓練を重ねて、日頃の逃げかき場所に入っていたら、避難できたのだと思う。皆さん、日ごろから避難路や避難場所を頭に入れておいてほしい。

宮城富谷市 大学生 佐々木花菜さん(20)
日ごろから意識
避難訓練に参加して、地盤がパニックになった。自分自身には気が付かないが、地域全体で防災前からの訓練を重ねて、日頃の逃げかき場所に入っていたら、避難できたのだと思う。皆さん、日ごろから避難路や避難場所を頭に入れておいてほしい。

岩手県大槌町 ホテル経営者 千代川茂さん(65)
道は体で覚えて
大槌町では、避難を呼び掛けても逃げない高齢者が多かった。「ここは津波が来るかわからない」といって逃げない。高台へ逃げたから財布や車を取り戻すことが出来た人もいた。車は押す。足で覚えることが大事だ。避難路は頭でなだけで覚えるのが一瞬。訓練を重ねることが重要だ。

津波の危険があるとしても、海に近い観光地の魅力を引き継ぎたい。災害が自分ごとになるのは、体験してみたい。話を聞きながら、心に次付いた人を地元で増やして、みんな防災の取組を続けることが重要になる。三重県志摩市の国府白旗、他地域のサーフィサーと地元住民が連携して、毎年津波の避難訓練を行っている。ぜひ参加してほしい。 三重大准教授 川口淳さん(53)

今村文彦さん(57)
東北大教授
津波の危険があるとしても、海に近い観光地の魅力を引き継ぎたい。災害が自分ごとになるのは、体験してみたい。話を聞きながら、心に次付いた人を地元で増やして、みんな防災の取組を続けることが重要になる。三重県志摩市の国府白旗、他地域のサーフィサーと地元住民が連携して、毎年津波の避難訓練を行っている。ぜひ参加してほしい。 三重大准教授 川口淳さん(53)

今回の一編は「二月七日掲載予定」です。私のシミュレーションでも、南海トラフ地震で二見浦が津波に襲われる危険性が高いとみています。必ず備えおいてほしい。むすび塾のように訓練と座談会を組み合わせることが大切だ。訓練だけでなく、課題の発見や話し合いが少なく、取り組が継続していかない。観光地の防災は難しい課題が山積しているが、ハワイや沖縄といった先達の取り組からヒントを得てほしい。